

2025年 ソニー幼児教育支援プログラム「科学する心を育てる」
～豊かな感性と創造性の芽生えを育む～

子どもの「声」を聴く保育

－ひと・もの・ことと関わる子どもの姿から読み解く－



奈良市立神功こども園

目次

I はじめに	1
II 『科学する心』についての考え方と取組のテーマ	1
III 研究の方法	1
IV 実践事例・学年考察	
事例 1 「お水、ジャー！」（0歳児）	2
事例 2 「見たいな。もっと近くに…」（1歳児）	2
事例 3 「ないいっつ？！？どこいったん？」（2歳児）	3
事例 4 「かんぱ～い！！」（2歳児）	4
事例 5 「カタツムリのさんぽ」（3歳児）	5
事例 6 「あれ？どこいった？」（3歳児）	5
事例 7 「お豆がとりたいの」（4歳児）	6
事例 8 「ひげ、いっぱいやで」（4歳児）	7
事例 9 「そらまめくんのベッド、めっちゃいいなあ」（5歳児）	8
V 総合考察	
（1）科学する心とひと・もの・ことの関わりについて	12
（2）科学する心を育む保育者の関わり（援助・環境）とは	14
VI 今後の方向性～成果と課題～	14
～あとがき～	15

I はじめに

本園は、平成29年4月より、保育園1園、幼稚園2園が統合、保育園舎を乳児棟、幼稚園舎を幼児棟として活用した分園型の幼保連携型認定こども園として開園した。当初はこども園としての運営に全職員が戸惑い、また分園型の為、両棟での実情を共有し難く、日々の実践を行うことで精一杯で研究を進めていくのは難しかった。その問題解決の為、令和2年度より、保護者への発信であるドキュメンテーションを活用した保育記録や保育の振り返りについて研究を進めてきた。その積み重ねにより、次第に保育者間での語り合いが日常的となり、語り合うことの楽しさを感じ、子どものことを理解しあう雰囲気が自然とつくられ、語り合うことが園の文化として定着してきた。更には、「子どものことをもっと知りたい」という保育者の思いが生まれ、乳児から幼児への（就学前の子どもの）育ちの連続性について、理解を深めようとする職員の意識が高まっている。

II 『科学する心』についての考え方と取組のテーマ

「子どものことを知りたい」という職員の思いから、研究主題のテーマを、令和5年度より「子どもの声を聴く保育」とし、現在もこのテーマで保育者が主体的に研究に取り組んでいる〈※子どもの声とは、発する言葉だけでなく、声にならない心の声（表情や仕草、態度等）を含むと考える〉。令和5年度は、子どもの表出行為に着目し、行為のきっかけや思いの変容を探った。令和6年度は、表出行為に見られる思いを探り、ひと・もの・こととの関わりの中での心の動きに着目して子ども理解を深めると共に、保育者の関わり（援助・環境構成）との意味について検討した。2年間の取組で、子どもの声を聴くことは、繊細かつ直感的な読み取りであるため、見落としている部分がないかと意識を持つことや、表出行為を捉え、その表出の意味を問うことが重要であること、また、今後も発達に応じた保育者の関わりについてより具体的に検討する必要がある等、保育者間で共通理解をした。

一方、「科学する心を育む」と照らし合わせて研究を進めたが、「子どもの声を聴く保育」と「科学する心を育てる」ことの関連性について、分析や考察が迫り切れず、また、子どもの表出行為を直近の事象からの見取りだけでなく、長期的・複合的な視点をもどのように取り入れていくか等の課題があった。これらのことを受け、令和7年度は「子どもの声を聴く保育」のサブテーマを、～ひと・もの・ことと関わる子どもの姿から読み解く～として、「科学する心を育む」と結び付け、改めて、本園の子ども達の姿から「科学する心」をどのように捉えるのかを話し合い、本園では「科学する心」を次のように考えた。

子どもは、子ども自身が生きている世界（ひと・もの・こと）と関わる中で、自ら、ひと・もの・ことと出会い、感受し、思考を展開し、広げていく。他者から教えられるのではなく、自らひと・もの・ことと出会い関わろうとする姿から生まれる「心の動き」や「表出行為」が、「科学する心の芽生え」であり、更に、「したい」「もっと」と好奇心や探究心をもって、ひと・もの・ことと関わり、さらなる気付きや理解、認識を深めていく。このように、心の動きの変化と様々な表出行為が積み重なり、それらが、その子どもの経験となり、その子にとっての「科学する心」は育まれていく（図1）。だからこそ、この一人一人の個性や経験、その子なりの考え（思い）を大事にしながら、心の動きを読み解き、実践する「子どもの声を聴く保育」が大切である。すなわち、「科学する心を育てる」ことは、「子どもの声を聴くことから始まる」と考える。

そこで、各年齢の発達や特徴を捉えながら、子どもの世界における心の動きを読み解いて、それぞれの年齢の子ども達の『科学する心』をどのように捉え、どのように育まれていくのか、そして、どのような保育者の関わりが科学する心を育むことに繋がっていくのかを検証していきたい。

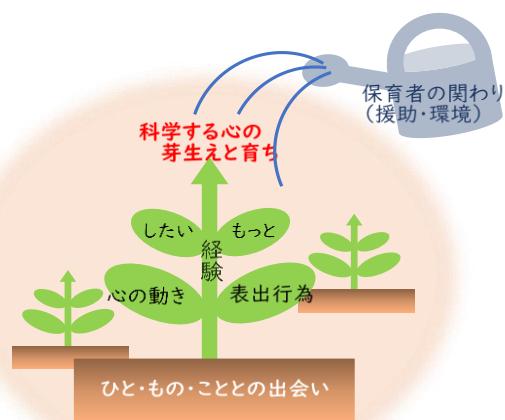


図1 科学する心の芽生えと育ち

III 研究の方法

子どもが心を動かした情動行為に着目した実践事例をもとに、次のことについて重点を置いて、研究を進める。なお、各事例のエピソードにおける着目点を下線等で記し、各分析内容を表中に記載する（※）。

- 子ども自らの情動を表出する行為を抽出し、子どもの思いを読み解き、ひと・もの・こととどのように関わっているのか、そこに興味、関心をもった要因や関わる要因と考えられることを「心の動き」として捉え、分析して明らかにする。（表出行為：下線、心の動きのポイントと感じた表出行為：網掛）
- 子どもの心の動きから、どのような保育者の関わり（援助や環境構成）が「科学する心」を育んでいくのか、保育者の関わりの意図を分析して探る。（保育者の関わり：点線、※（表中）援助・環境：吹き出し）
- 発達等を踏まえた個々の心の動きの在り様を考察して「科学する心」を捉えるとともに、年齢的な特徴を明確にして「科学する心」が育まれていく経過を探る。

IV 実践事例・学年考察 ◎=子ども ⑦=保育者の言葉

事例1「お水、ジャー！」 0歳児 2025年7月

タライの水に触れて遊んでいたA児(11ヶ月)。タライの中に保育者がa ペットボトルを半切して底に穴を開けて作ったシャワーを入れると、すぐ手に取った。最初は①それを水に入れてじっと見ているだけだったが、b 保育者がシャワーをして見せるとジャーっと水の音が鳴り、②A児は水が流れ落ちるのをじっと見ていた。そしてA児も③水の中にペットボトルを入れて、上にあげるという動作を繰り返すようになった。最初は上げ下げが速く、水面にペットボトルがパシャパシャあたることを繰り返すだけで水は出てこなかったが、ふとした時に水の中に入り、A児はそのペットボトルをゆっくり上にあげた。すると、シャワー状に水が出て、流れる水をじっと見ていた。c ④「ジャーって出てきたね！」と笑顔で言うと④ニコッと笑い、再びペットボトルを水の中に入れて遊び続けた。



子どもの思い	ひと・もの・こととの関わり、心の動き	援助・環境 (保育者の意図)
①これ、なんだろう？	〈もの〉ペットボトルを手に取って水に入る	a すくいやすい大きさのペットボトルシャワーを準備する (『水をすくう』という動作やシャワーの水の動きを楽しんで欲しい)
②水がいっぱい出てきた！	・保育者が入れたものが気になる 〈こと〉保育者が水の中から出したペットボトルを見る ・流れ出てきた水の音への反応	b 保育者がして見せる (こんな遊び方があると知って欲しい)
③先生と同じことしてみよう	・出てきた水が気になる (興味の芽生え) 〈ひと〉保育者がしていた動きを真似ようとする ・保育者の動きへの興味、模倣	A児の姿を温かく見守る (A児が思った通りに行動して欲しい)
④先生が話かけてくれた。笑ってる。嬉しいな	〈もの・こと〉ペットボトルを水面で上下に動かす ・ペットボトルが水面にあたる感触 ・水面にあたる音 (聴覚) 〈ひと〉保育者に笑い返す ・声をかけてもらったことが嬉しい (喜び) ・保育者の笑顔を見て安心する (安心感)	c A児が見ていることを言語化 (感じたことに共感する)

＜考察＞ 水遊びを始めたばかりで、水に手を入れたり水面を叩いたりして水の感触を楽しんでいたA児。ペットボトル玩具を見るのも初めてで、下線①では、玩具の使い方が分からず、水中に玩具を入れ、じっと見ていたと思われる。bでは、保育者が自分と同じ玩具を水から持ち上げるとシャワーが出てきたことで、保育者の動作に興味をもち、模倣したのではないだろうか。最初は上げ下げの動きが速かったため、シャワーのようにはならなかったが、水を入れる時間が少し長くなった時にペットボトルの中に水が入り、少し重くなったため引き上げる動作がゆっくりになり、偶然、シャワーのように水が出た。模倣と偶然が重なって出たシャワーだったが、下線④の表情は、A児が見たことを保育者が受け止め、笑顔で返したことで、A児の中で楽しいという経験となり、もっと水遊びをしたいという思いに繋がっていくと考えた。

《学年考察》 0歳児は本能的に、聞こえた音に反応する、見えたもの・目についたものをじっと見る、すぐに手をのばす、掴む、口に入れるなど、感覚を通して身近なものと関わってみようとする姿があり、その姿は事例にも見られた。また、保育者を真似る行動や、受容された時の子どもの表情からは、安心できる保育者との関係(安心感)が基盤となり、模倣という行為を通してものやこととの出会いや関わりを少しずつ広げている事が分かる。このように、他年齢児に比べて多くある0歳児の“初めてのもの・こと”と出会いは、模倣等の大人の行動や反応、関わりを介しながら、喜び、楽しさなどの様々な感情と結びついたり、興味の芽生えや目の前の事象に関わろうとする姿へと繋がったりしていくと言える。

事例2「見たいな。もっと近くに…」 1歳児 2025年5月

保育者がシロツメクサにとまる小さなチョウを見つけ a ①「チョウチョさんいるよ。ほらあそこ」としゃがんで指を差しB児(2歳1ヶ月)に知らせた。B児は②じーっと目を凝らしてチョウを探し、見つけて近づいていった。すると、チョウは飛んで近くのシロツメクサにとまった。B児が③再び近づいていくと、チョウはまた飛んでいき、その行為を数回繰り返すうちに、遠くに飛んでいき、B児は④口をぽかんと開けながら目で追った。



⑤「チョウチョさん飛んでいっちゃったね」と言うと、小さく頷いた。今度はB児の近くの花にとまる小さな虫を保育者が見つけ、b そっと近づいてしゃがみ⑥「ここにも虫さんいるよ」と指差しして知らせた。すると、B児

は少し離れたところから、再び目を凝らして虫を探した。①「虫さんいた？」と尋ねると、視線を虫に向けたまま大きく頷いた。B児は④両手で丸をつくって双眼鏡のようにし、虫との距離を保ったまま見始めた。c⑤「いいね」とB児の双眼鏡を真似た。そしてd隣で虫を見ながら⑥「お花のジュース飲んでるね。暑いから喉乾いてるのかな」と言うと、B児は手の双眼鏡でじっと見たまま2回小さく頷いた。そして⑦双眼鏡をやめ、虫にそっと近づき、じっと見ていた。

子どもの思い	ひと・もの・こととの関わり、心の動き	援助・環境（保育者の意図）
①チョウさんだ。近くで見たいな	〈もの〉チョウを探し、近づく ・チョウへの興味 ・近くで見たい（興味）	a チョウの場所を知らせる声かけ (小さなチョウに出会い、見たり追いかけたりして興味をもって欲しい)
②もう1回見たい！	〈もの〉チョウに繰り返し近づく ・もう1回見たい、近づきたい（興味）	b B児と同じ目線になって虫に近づく (虫にそっと近づく姿を見せたい)
③あっ、チョウさん飛んでいっちゃった…	〈こと〉チョウを目で追う ・チョウが飛んでしまったこと（残念）	
④虫さん？なんだろう？	〈もの〉小さな虫を見る ・小さな虫への興味 ・小さな虫を見たい（興味・意欲） 〈こと〉双眼鏡のように手で形をつくる ・双眼鏡の玩具を覗いた経験 ・保育者や母親が手で双眼鏡をつくっていた記憶 ・もっとよく見てみたい（興味）	c B児を認める声かけ、同じ行動をとる (B児の行動を共有し、喜びに繋げたい)
⑤やっぱりもっと近くで見たい！先生近くにいてるし、大丈夫そう	〈ひと・もの〉近づいて小さな虫を見る ・近くで見たい（興味） ・保育者が側にいる安心感	d 虫の様子を擬人化して知らせる (親近感やより興味をもって欲しい)

＜考察＞ チョウを近くで見ようと近づいたが、飛んでしまったことを残念に思う様子が、B児の小さなうなづきから読み取れる。新たな虫にはすぐに近づかず距離をとっていたのは、近づくことで飛んでいったチョウとの関わりの経験やこの虫に対して用心する気持ちからではないかと推察する。

それでもこの虫をよく見たいという思いから、双眼鏡の玩具を覗いた遊びの経験や保育者や母親が手で双眼鏡をつくって見ていた記憶とも繋がり、自分の手で双眼鏡をつくるという行動になったのではないかと思われる。保育者はB児と同じこの行動をすることで、手の双眼鏡から見る虫は、よりフォーカスされて見えると気付いた。そこで、虫への親しみの気持ちに繋がられるようにと、保育者はB児に「花のジュースを飲んでいる」という虫の様子を擬人化した言葉をかけ、これがきっかけとなって“もっと近づいて見たい”という気持ちに繋がり、虫との距離を縮め、見るという行動となったと考えられる。

＜学年考察＞ 1歳児になると、身体的発達に伴い、少しづつ視界が広がり、いろいろな“もの・こと”が見えるようになる。そして、探索活動は徐々に活発になり、園庭での行動範囲も広がっていく。事例から、子どもは探索中、出会ったもの（虫）に対して用心することはありつつも、気になり、見てみたいという気持ちを、近づく、頷く、距離をとるという行動やじっと見るなどの視線で表していた。これらの子どもの表出行動は、物事を「見える」から「見る」という捉え（意識）で「ものと向き合う」子どもの思いの表れである。また、保育者が子どもの思いを汲み取り共感することで、ものに関わることへの安心感をもたらし、保育者の見守りや言葉により「もっと近くで見たい」という思いの変容に繋がっていったと思われる。

事例3「ないっつ？！！どこいったん？」 2歳児 2025年6月

保育室のカーテンに夕方、窓から光が差し込んだ。近くでままごと遊びをしていたC児は①ふと光に気付き、顔を近づけ、真剣な表情で見ていた。その場にいた保育者に②驚いたような表情を見せたので、a保育者もC児と同じように驚いた表情を見せた。その後C児は③もう一度光に視線を戻し、少しづつ指先を光に近づけた。指先で光を擦ったり、指先をじっと見たりした後、カーテンを少し揺らし始めた。そこにD児がやってきて光を触ろうとし、揺れていたカーテンを開けた。C児が立ったり座ったりしながらD児の様子を見ていた時、立ち上がったC児の背中に光があたり、光が消えたように見えた。C児D児④「どこいったん？」「ない」とつぶやき、カーテンを動かして後ろを覗いたり、場所を移動したりした。b⑤「どこいったんやろうな？」と一緒に探したり、様子を見守ったりした。二人がしゃがんだ時、もう一度光が現れた。C児はその光に触れ、c保育者と目線を合わせて笑い、繰り返し光を触っていた。



子どもの思い	ひと・もの・こととの関わり、心の動き	援助・環境（保育者の意図）
①なんだろう？なんかある！	〈もの〉普段はない現象（光）を見る ・触ることで、何があるのかを確かめようとする ・光っているものに対して惹かれる興味 〈こと〉いつも過ごしている環境の中での違いに気付く ・普段には見えない光に気付く（発見） 〈ひと〉保育者に驚いたことを伝える ・光への驚き ・保育者と顔を見合わせて確認（共有） 〈もの〉普段はない現象（光）に触れようとする ・光への興味 ・指で触る、カーテンを揺らすとどうなるのかを試す ・もう一度試してみようとする 〈こと〉気付きを言葉にして、光を探す ・いつも過ごしている環境の中での違いや変化に気付く ・光が突然消えた事への驚き ・光がどこかにいったと感じる（不思議） ・「どこいったん？」と言葉にする 〈もの〉光が消える事象に気付き、光を探す ・気付いた光が消えたり見えたり動いたりしたことでの更なる興味 ・どこにあるのかという疑問、不思議	声をかけずにそっと見守る（見たい、触れたいという気持ちを大切にしたい）
②先生も見た？		a C児と同じ表情で共有する（言葉ではなく、純粋に驚きの感情だけを受け止めたい（共感））
③これ何かな？触れるかな？ 指についた？いや、ついてない？		b C児の背中で光を遮っている事を知らせずに見守る（2人の不思議に感じる気持ちを大切にしたい）
④あれ？ない？ なんで？？どこいったん？		c 子どもと気持ちを通り合わせて楽しみたい（保育者が一緒に楽しむ事でより楽しんで欲しい）

＜考察＞ 普段遊んでいる場でいつもと違うことが起こり、「なんだろう？」と覗き込んだり触れるかどうかを確かめようとしたりする姿が見られた。保育者が、C児の気付きに共感する表情を見せたことにより、更なる光への興味に繋がっていったと考えられる。また D児がその場に表れたことによって光っていたものが消える現象が起こり、C児の不思議な思いが「どこいったん？」という言葉で表され、C児の心がより動かされたのではないか。また、保育者が一緒に光を探したり、消えた不思議さに共感したりしたことで、C児 D児にとっては、保育者がいつも同じように感じてくれているという安心した気持ちになり、見え隠れする光を探すことを繰り返す姿となったと考える。

事例4「かんぱーい！！」 2歳児 2025年6月

水遊びが大好きなE児は、a ホースが繋がっている水道でホースを動かし水を流して遊んでいた。自分の体に水をかけているうちに、①隣にあるホースも持ち、両手に持て遊び始めた。しばらく体や地面にかけていたが、②ホースから流れる水をじっと見始め、2本のホースの口を近づけ始めた。ホースの口が重なるようにすると③E児の顔にかかるほどの水しぶきが起こった。E児は一瞬驚いて目を瞑ったが、すぐに満面の笑みを浮かべた。側にいた保育者と目が合い、b ①「お水いっぱいかかったね」と言うと④E児「かんぱーいってしたの！」と笑いながら顔にかかった水をぬぐった。その後も嬉しそうに「かんぱーい！」と言いつながら何度もホースの口を合わせ、水しぶきを楽しんでいた。



子どもの思い	ひと・もの・こととの関わり、心の動き	援助・環境（保育者の意図）
①ホースもう一個使いたい なあ	〈もの〉短いホースを両手に持て遊ぶ ・複数ある短いホースに興味をもつ ・もっと水を使いたい欲求 〈こと〉ホースを使って水で遊ぶ ・水の勢いや冷たさ、心地よさを体で感じる（感覚）	a 水を自由に出せるホース (水と存分に触れ合って欲しい)
②水がいっぱい流れてくる なんか面白そう	〈もの〉2本のホースを使う ・それぞれのホースから出る水の流れ（興味） 〈こと〉ホースの口を合わせてみようとする ・水の抵抗を感じながら2つのホースの口を近づけ始める（試す） ・何かが起こるかもしれないことへの期待	b E児がホースで遊ぶ姿を見守る（やってみたいな、面白そうだなど感じたことを存分にして欲しい）
③？？？わっ！！	〈こと〉水しぶきがかかる ・ホースの口を合わせると水しぶきが起こるという偶然の出来事への驚き	
④“かんぱーい”したみたいや ったな。おもしろかった？ 先生も見てた？？	・顔面に水がかかる面白さ（想定以上の出来事） 〈ひと〉E児が感じた面白さを保育者に伝える ・同じ場面を見て共感する保育者の存在（安心感、嬉しさ） 〈こと〉自分の思ったことを知っている言葉で言う ・2本のホースでの遊びと自身の経験が結び付く（言葉）	b 状況を受け止め、状況を言語化する（E児が感じた面白さを受け止め、一緒に楽しみたい（共感））

＜考察＞ 保育室のすぐ前に短めのホースが複数あり、自由に水を流せる環境が水と存分に触れながら気持ちよさや心地よさを感じることへと繋がっている。最初は体に水をかけることを楽しんでいたE児だが、もっと水に触れたい、ホースをもっと使いたいと感じ、両手にホースを持つ姿になったのではないか。水の流れを見ているうちに何か面白さ、魅力を感じ、何となくホースの口を近づけ始め、ぴったり重なったことで水しぶきが起こり、この偶然起こった予期せぬ水の動きに一瞬戸惑いも見られるが、勢いよく顔に水がかかったことで面白さへと変

化していることが読み取れる。現象を言葉で説明することはまだ難しいが、生活経験の中で知り得た言語「かんぱい」とイメージが繋がり、保育者の問い合わせにもその言葉で伝えようとしていた。瞬間的な出来事を傍にいた保育者も一緒に見て共感したことが、繰り返し遊ぶ姿に繋がっていったのではないかと考える。

《学年考察》 2歳児は、目に見える現象や感触などを通して「なんだろう?」「やってみたい」という好奇心が活発になる時期である。普段と異なる違和感を自分なりに察知し、感じたことをやってみようとして、じっと見る、触る、何かしら行動を起こすなどして、自分なりにものと関わろうとしている姿が事例からも読み取れる。普段と異なる現象や様子に気付くのは、日々様々なものと関わる中で、感じたことや起こったことを見て、体験、体感して体や心に記憶しながら、自分が経験したことを生活や遊びに繋げ始めているためである。また、自分でしたいという自我が強く出てくる時期でもあり、自分で見つけたことを保育者に表情や仕草、自分なりの言葉等で伝えようとする姿が出てきている。保育者が子どもの思いを言語化し、子どもが見つけたことや気付いたことに共感し一緒に不思議さや面白さや楽しさを感じたりすることで、子どもの「もっと」という思いが出てくると考える。

事例5「カタツムリのさんぽ」 3歳児 2025年5月

F児が①ワゴンに虫かごを乗せて引っ張り、真剣な表情で歩いていた。保育者は様子を見守りながら、F児が足取りを緩めた際に a「何してるの?」と尋ねた。F児は保育者の方を向き、少し自慢げに「カタツムリ、お散歩してるの」と答えて、すぐさま前を向き、「お散歩行ってきまーす」とその場から勢いよく出発した。その様子に b①「カタツムリさんびっくりしちゃうよ」と声をかけると、②F児は一度足を止め、ワゴンを見つめて数秒後にはゆっくり歩きだした。しばらくすると、F児はワゴンを置いて砂場の方に移動し、③お椀に砂をたくさん入れて飼育ケースの横にそっと置いた。c①「それ何?」と尋ねると「カタツムリのご飯だよ」と言ったので「ご飯つくってあげたんや!カタツムリさん、嬉しいね」と答えると、F児は④ニヤリと笑った。



子どもの思い	ひと・もの・こととの関わり、心の動き	援助・環境（保育者の意図）
①カタツムリといっしょにおさんぽしに行こう	〈もの〉ワゴンに虫かごを乗せて引っ張る ・ワゴンにものを乗せて運ぶ楽しさ ・カタツムリへの興味、親しみ	a 見守りつつ、尋ねる (子どもの思いを知りたい)
②カタツムリびっくりするのか。急いじゃだめだな	〈ひと・もの〉足を止め、カタツムリを見る ・保育者の言葉で、カタツムリが乗っていることに意識を向ける ・目で見たことと保育者の言葉が一致する（気付き） 〈こと〉虫かごが倒れないようにゆっくり歩く ・カタツムリがびっくりしない方法を考える ・歩き方を調整する	b 声をかけて気付かせる（子どもの散歩を楽しんでいる気持ちを大切にしながら、小動物に優しく接して欲しい）
③カタツムリさん、ご飯だよ、どうぞ	〈もの〉砂でカタツムリのご飯をつくり、あげる ・カタツムリもお腹が空いていると考える（アニミズム的感覚） ・砂をご飯に見立てて遊んだままごと遊びの経験 ・飼育経験と結びつけ、ご飯をあげようとする	
④ぼくが作ってあげたよ。どう、すごいでしょ	〈ひと・こと〉保育者にカタツムリのご飯をつくったことを認めてもらう ・ご飯をあげたことを満足 ・すごいアイデアだったと自慢に思う気持ち	c 傍で見守り、尋ねる (子どもの傍で見守り思いを知りたい、していることに共感したい)

《考察》 F児は園庭でよくワゴンを走らせて遊んでおり、また、家庭でカタツムリを飼育したことがあるという経験からカタツムリに興味をもち、お気に入りのワゴンで運んでみたいという気持ちになったのではないか。また、F児はカタツムリを乗せてワゴンを引っ張る行為自体を楽しみ、遊び仲間として散歩をすることに喜びを感じていた。保育者はその気持ちを大切にしつつも、小動物に優しく接して欲しいと思い、言葉をかけたことで、カタツムリに意識が向き、カタツムリに心を寄せてF児なりに考えたから、下線②でスピードを変化させたと思われる。下線①のカタツムリに親しみ、遊び仲間のような思いで関わる姿や、下線③のカタツムリもお腹が空いたんだろうというアニミズム的な感覚から、F児は自分自身とカタツムリを同一視し、ごっこ的な遊びの中の“もの”として捉えた関わりをしたと推察できる。

事例6「あれ?どこいった?」 3歳児 2025年6月

G児は、ペットボトルがいっぱいになるまで水を入れ、蓋を閉めて持ち運んでいた。側にいた保育者と目が合うと足を止め、①「重たいよ~」と言いながら微笑んだ。a①「重たそうだね~」と笑顔で返すと、再び歩き出した。しばらく歩いて行った後②ふと足が止まり、ペットボトルを横たえて顔を近づけじっと覗き込んでいたので、保育者も同じようにして覗くと、水中



に気泡が1つできていた。b ①「これ、何だろうね」と言うと、G児は③黙ったままペットボトルを左右に揺らし、気泡が動く様子を目で追っていた。ペットボトルを縦向きにすると、気泡が上まで昇って見えなくなり、G児は④数秒間動きを止めて眉をしかめ、⑤ペットボトルの蓋を開けて中を覗き込んだ。c ①「丸いのなくなっちゃったね。どこ行ったのかな?」と言うと、G児は⑥少しの間一点を見つめた。そして、再び蓋を閉め、ペットボトルをひっくり返すと、また気泡が1つ現れた。保育者がd 気泡を指差して「あ!! また出てきたね!!」と言うと⑦にんまりと微笑み、その後もペットボトルをいろいろな方向に動かしながら、気泡ができたり無くなったりする様子をしばらく見ていた。



子どもの思い	ひと・もの・こととの関わり、心の動き	援助・環境(保育者の意図)
①いっぱい入れたから重たいんだよね。こんなに重たいもの持ってるんだ。すごいでしょ?	〈もの〉水の重さを感じる ・重さという感覚的な刺激 ・重たいものを持っているという自信や嬉しさ	a 声をかける(思いに共感したい)
②水の中に何かある… これは何だろう?	〈ひと〉保育者に言葉と表情で知らせようとする ・体感している水の重さを保育者と共有したい 〈こと〉気泡の存在に気付く ・得体の知れないものが現れたことへの興味 〈もの〉気泡をよく見てみようとする ・目の前に見えているものは何なのかという疑問	b 声をかける(G児が感じていることを知りたい。気になったものに満足するまで関わって欲しい)
③何かわからないけれど、動いているなあ ④あれ?見えなくなった。何で?どこに行っちゃったの? ⑤もしかしたらここにあるかも…あれ?やっぱりないな… ⑥どこに行ったのかな…さっきみたいに動かしてみたらまた出てくるかな? ⑦そうそう!これ!よかった~また出てきた!嬉しいな	〈もの〉ペットボトルを揺らした時の気泡の動きを目で追う ・動かすと気泡も動くことへの気付き(好奇心) ・気泡が揺れ動く視覚的な面白さ 〈こと〉ペットボトルをじっくりと見ながら、自分なりに考える ・目に見えていた丸いものが突然無くなった驚き、残念、不思議さ 〈こと〉蓋を開けて気泡の存在を確認する ・気泡の動きを思い出し、蓋に隠れて見えていないだけで中にあるかもしれないと予想する ・気泡をもう一度見たい(欲求) 〈こと〉再度ペットボトルをひっくり返す ・どうすれば気泡が出てくるかを自分なりに考えて試す 〈ひと・こと〉保育者と思いを共有する ・再び気泡が現れた嬉しさ、安堵 ・保育者が自分と同じことを言葉にした安心感	近くで見守る(したいと思ったことを心ゆくまでして欲しい。何か起きた時にすぐに反応したい) c 声をかける(G児の思いに寄り添いたい。なぜ無くなったのか、G児なりに思いを巡らせて欲しい)
		d 思いを想像して言葉にする(気泡が再び現れた嬉しさに共感したい)

＜考察＞ 下線①の「言葉」や「表情」から、水の重さの体感、自分でペットボトルを水でいっぱいにする嬉しさやそれを持ち運ぶ自信を得ていた。その後、偶然的に生まれた気泡への気付きが契機となり、下線②③の「行動」や「視線」からは、じっくり見たり動かしたりする中で、気泡そのものへの興味や好奇心が高まっていったことが分かる。気泡が無くなるという予期せぬ出来事は更なる契機となり、G児の驚きや不思議さを搔き立てたと考える。下線⑤⑥の行動からは、G児は気泡を手に取れる丸い物体と捉え中身を確認し、そして、自分なりに思いを巡らせるうちに、再び気泡が現れるのではないかとペットボトルを動かして試そうとする姿に繋がったのではないだろうか。普段はよく話をするG児だが、この時「言葉」で思いを表出することは殆どなく、言葉にならないほど不思議だと感じるものとの関わりに没頭していたと思われる。保育者のG児の目の前の状況や思いを想像して言語化したことや、共に不思議がるという関わりは、G児が感じていることへの意識化や、より気泡を注目して見ることに繋がったと考えられる。

『**学年考察**』 3歳児のこの時期の子どもは、保育者が一緒に遊ぶ中で、身近なものや事象に見られる小さな変化や気付きとの出会いに心を動かされ、その事象に引き込まれるように見て、自分なりに関わっていく。

事例においても、カタツムリに親しみをもち生物を同一視して関わったり、気泡という偶然出会った自然事象に引き寄せられ、不思議さや面白さを感じて行動したりしていた。さらに、子どもが思いを「言葉」よりも「行動」や「表情」で表出することが多く見られ、特に、2つの事例に共通していた“体の動きを止める”という「行動」は、心を大きく動かされ自分なりに思いや思考を巡らせていた瞬間の表れであることが分かる。時間的には短い関わりではあるが、F児 G児はそれぞれ立ち止まる、じっくり見る中でその事象に思いを寄せて考え、試行する経験であったと考える。

事例7「お豆がとりたいの」 4歳児 2025年6月

①H児とI児が築山の上で、シャベルの持ち手を紅葉の木の枝にひっかけて引っ張っていた。すると、H児が「先生見て! お豆(紅葉の種)取れた。」と②ニヤッと笑い保育者に見せた。a ①「ほんとだお豆! どうやって取ったの?」と聞くと、「こうやって!」とシャベルで枝を引っ張った。H児は「お豆が取りたいの」と再び右手の

シャベルで枝を引っ張り、左手で掴もうとしたが、葉が跳ね返ってなかなか掴むことができない。③「取れない、取れない」と怒ったように言うH児に、近くを通ったJ児が「はい！」と手で葉っぱを掴みH児に近づけた。しかし、④H児はその葉をちらっと横目で見ただけで、J児の声かけには反応を示さず、シャベルを使って一人で取ろうとし続けた。何度か繰り返すうちに、H児「先生、取って！」と言うので、b⑤「わかった。先生もやってみる！…難しいなあ」と言いながらシャベルで同じ様にしていると、隣でシャベルでずっと葉をつづいていたI児が「落ちた！ほら見て葉っぱ、落ちた！」と保育者に笑いながら言った。⑥「ほんとや！落ちたね！」と言うと、H児は落ちた葉を見て、⑦「あ！」と言って手に取り、豆の部分だけをちぎっていた。⑧「お豆あったの？」と聞くと、H児は保育者に視線を向けずに、豆をちぎりながら⑨「なんとか見つかった」と独り言のようにつぶやいた。



子どもの思い	ひと・もの・ことの関わり、心の動き	援助・環境（保育者の意図）
①お豆が取りたいな これ（シャベル）を使ったら取れるよ	くもの>シャベルでお豆を取ろうとする ・自然物への興味 ・慣れ親しんだ大好きな場所 ・シャベルという道具を工夫して使う	a 共感の声かけと問いかけ (次への意欲へ繋げる)
②取れた、嬉しい 先生これいいでしょ	くひと>お豆が取れたことを共有する ・お豆を取ることができた嬉しさ・満足感	同じ目線になって見守る（自分で取ろうとする気持ちを尊重）
③さっきは取れたのに！先生にも取れるよって見せたい	くこと>お豆が取れないことに苛立つ ・取れた（経験）から取れるはずという予想や確信 ・取れないことに対するもどかしさ	
④ちがうの、私はこれ（シャベル）で取るの	くひと・もの>シャベルでお豆を取ろうとする ・道具を使って取る楽しさ ・一度成功したからこそ、同じ方法でもう一度取りたい（意欲） ・友達にしてもらうのではなく自分でしたい（強い意志）	b同じ行動をとる（シャベルで取りたいという気持ちを大事にしたい。難しさに共感しつつ励ましたい。自分で取れたという成功体験をもう一度味わって欲しい）
⑤あ！あれ取れるやん！	くもの>落ちた葉を捨う ・一緒にしていたI児が落とした葉っぱ（仲間意識） ・保育者がI児の落とした葉に反応したこと（関心） ・ずっと取れなかったものが手の届くところにあると気付く	I児に共感の声かけ（I児が安心して自分のしたいことを楽しめるように）
⑥やっと取れた	くこと>お豆を手に入れることができたことを言葉にする ・苦労して取っていたこと（安堵感・やり遂げた感）	

＜考察＞ お豆への興味から、使い慣れたシャベルを自分なりに工夫して使い、何とかして手に入れようとする姿や、お豆を取ることができた成功体験（下線②）を頼りに、うまくいかないながらも同じ方法で何度も挑戦するというH児の姿が見られた。また、途中J児が手を貸したが受け入れなかった姿には、H児の強い意志も感じられた。このH児の取り方や取ることへの強いこだわりや思いから、保育者はH児が助けを求める際、成功体験を意識した援助（取って渡すのではなく、同じ様にシャベルを使う）を行った。H児がI児が落とした葉を手にした姿は、お豆を手に入れたいという純粋なH児の気持ちと共に、隣で同じ様にして遊んでいたI児が落とした葉だったことや何度もシャベルで挑戦し続けたことでの満足感、また、一緒に遊んでいた保育者がその葉に反応した事など、様々な要因とタイミングが重なったからだと考えられる。友達の存在を感じつつも、H児のI児・J児・保育者に対する意識（関わり方）の違いをもって、自分のしたいことに強い思いで行動し、夢中になるH児の姿が現れていた。

事例8「ひげ、いっぱいやで」 4歳児 2025年7月

夏野菜の菜園活動や5歳児のサツマイモの苗植えの興味から、保育室前で土嚢袋にサツマイモの栽培を始めた。また、ごちそうづくりで使っていた野菜のへたと月間絵本（『ワンダーブック5月号』（世界文化ワンダークリエイト2021））で見た野菜の水栽培の写真への興味から、やってみたい思いが生まれ保育室で水栽培を始めることになった。毎日保育者と一緒に水を変えながら見ている中で①「ネギはネギが出てきた」②「小松菜は真ん中（から出てきた）」③「ニンジンの葉っぱは可愛いよ」、また、少し遅れて出てきたサツマイモの芽を見て「なんか葉っぱ出てきた」と気付きを伝え、その生長も楽しみにしていた。



ある日、子ども達が野菜のへたの水替えをしていると④「めっちゃ葉っぱ出てる」⑤「ハートの形してる」と傍にいた保育者に話したので、保育者は笑顔でうなずいた。⑥K児は葉をちぎらないようにそっと触ったり、茎から葉にかけて指でつまんだりしながら触っていた。すると葉の下の根を見つけてK児⑦「ひげや」とぼそっとつぶやいた。それを聞いていたL児「ぼくも（見たい）」とK児の手からサツマイモを取り、「うわー白いひげついてる」と根を見つめ、目をまん



丸にして大きな声で言った。④K児はその様子を一瞬じっと見ていたが、次の瞬間「かして！」とL児からサツマイモを⑤素早く取ると「もしやもしやしてる」とひげを手で触りながら、微笑んだ。そして⑥K児「見て！ひげいっぱいいや。サツマイモひげ出てる」と視線はひげに向けたまま、周りにいた友達にサツマイモを見せた。

子どもの思い (K児)	ひと・もの・こととの関わり、心の動き	援助・環境 (保育者の意図)
①葉っぱいっぱいや。ハートだ	<もの・こと>サツマイモの葉の様子に気付く ・葉が出てきたことへの意外 (驚き・興味) ・他の野菜よりも葉がたくさん出ていたこと (比較) ・葉の形がハートだと気付く <ひと>保育者にサツマイモの状態を言葉で伝える ・気付いたことを保育者に知らせたい (共有) <もの>葉や茎を触る ・触りたい (興味) ・指でつまんで茎や葉を知ろうとする (好奇心) ・触る場所によって触り方を変える (大切に扱う気持ち) <もの>ひげを見つける ・これが何なのか気になる (不思議さ) ・根をひげとイメージする (見立て) <ひと・こと>L児の様子を見る ・L児の発言にひげだったと確信する ・自分が先に見つけたというL児の言葉への葛藤	絵本を見る・保育室で水栽培をする (子どもたちの気付き・興味を受け止めたい、より身近に感じながら自然物に興味を持って欲しい)
②葉っぱたくさんあるな	<ひと・こと>葉や茎を触る ・触りたい (興味) ・指でつまんで茎や葉を知ろうとする (好奇心) ・触る場所によって触り方を変える (大切に扱う気持ち) <もの>ひげを見つける ・これが何なのか気になる (不思議さ) ・根をひげとイメージする (見立て)	子どもと一緒に世話をしながら野菜を見たり話をしたりする (栽培への興味、変化への気付きを共有したい)
③なんか、ひげみたい	<もの>ひげを見つける ・もう一度ひげの感触を確かめる (感覚・興味) ・手触りを言葉で表現する (イメージ) ・やっぱりひげだと確信する喜び	K児のつぶやきを見守る (自分なりの表現した言葉を大切にしたい)
④え、ぼくが見つけたんだよ	<もの>サツマイモを見つめる ・自分がひげを見つけたという強い思い (興味の高まり・嬉しさ・自信)	K児の姿を見守る (じっくり見て、自分なりに表現した言葉を大切にしたい)
⑤ぼくが見ていたサツマイモ！ ひげいっぱいや	<ひと>ひげを友達に知らせる ・面白いものを見つけた嬉しさ・満足感 (共有・優越感)	
⑥ぼくが見つけたんだよ みんなに教えてあげる		

＜考察＞ 土嚢袋のサツマイモと違い水栽培では葉や根が出来ていることへの驚きや、特にサツマイモについては他の野菜に比べて葉がたくさん出ていたことが、子ども達の関心を高め、興味をもつ要因となっていた。子ども達は葉に興味をもち、触れ、気付きを言葉にしていたが、じっくりと見る中でK児は根に気付いた。その根を見た時に、それが何なのか不思議に思いつつ、K児の中で“ひげ”とイメージが重なり、サツマイモへの興味を深めたと考える。他の子ども達にとってひげの言葉は刺激となり、間近で見たい触りたいという思いが生まれたことが網掛け部分のL児の表出からもわかる。L児の表出後、K児は自分が先に見つけたひげをもう一度見たい、触りたいという思いを強め、改めてサツマイモを見たことでの新たな気付きは、周りに知らせたい気持ちとなり、目が離せないほど興味深いものとなったことが表出から読み取れる。保育者がその場で思いを共にし、子どもの傍で見守ることは、子ども達が気付きや思いを言葉や表情等で表出することに繋がっていたと考える。

『学年考察』 園の好きな場所で日々思う存分に遊び、馴染みの自然物や身近な様々なものに触れ、扱ってきたことで、意欲的にものと関わったり、新たな発見をしたりしていた。身近な物事に没頭し、じっくりと見ることから、もっと見たい、知りたい、やりたい、こうしたいという思いが芽生え、違いへの気付き、好奇心の高まり、自然物への親しみなど、様々な感情や思いへの基盤とその経験を積み重ねていた。また、用具を柔軟な発想で使って目的を果たしたり、見つけたものを見つけて言葉にしたり、自分なりの方法や行動を起こして物事に向き合おうとしている。

ひと（友達）との関わりにおいて、この時期の4歳児は、保育者の存在を感じつつ、友達の姿を感じながら遊び、よく見る、関わろうとする、行動を同じようにするなどしていた。その関係性は、その場での友達との関係性、その時の気持ちやその状況の中での思いを基準にした、他児を受け入れる、言葉に耳を傾ける、刺激や影響を受けて行動する、視線を向ける行動であって、まだまだ自分の思いを軸にして友達との関係性を築いていく段階であると考えられる。しかし、その個の気付きや発見を、友達や保育者と共有することで、「もっと」という思いがより一層膨らんでいくと考えられる。

事例9「そらまめくんのベッド、めっちゃいいなあ」 5歳児 2025年5月～7月

＜“収穫したそら豆”と“絵本のそらまめくん”が繋がる＞

昨年度から栽培していたそら豆を収穫し、触れたり遊びに取り入れたりしてきた。絵本『そらまめくんとながいながいまめ』（小学館2009年）をクラスで見る中で、ベッドを船にしている場面に大きな関心を示し、みんなで“そらまめくんのベッド”をつくることになった。



◆事例9-1 <ベッド(船)の材料はどうする?>

- ◎「段ボールでつくれるんちゃう?」◎「いや段ボールは水に弱い!」⑦「じゃあどっちもやってみる?」
 ◎「やる~!!」と子ども達は嬉しそうにウキウキした様子で水を張ったタライの周りに集まった。

~実験① 浮かぶかな~

一枚の段ボールを水面に置くと、揺れながら水に浮かびM児①「浮くんや!」と驚き、喜んだ。a⑦「これならそらまめくんも乗れるかな!」N児「えっ、いける?」O児②「何か乗せてみたら?」とO児はハサミを乗せた。すると、段ボールは水の中にどんどん沈んでいった。それを見て③P児「もっと(段ボールを)いっぱいにするねん!」Q児「100枚くらい!うそそ!でもいっぱい!」O児「多すぎ!10枚くらい!」と、10枚の段ボールを重ねると、1枚の時より長く浮いた。子ども達は④「おおお!」と嬉しそうに見ていたが、少しずつ水中へ沈み⑤「あー」とがっかりしていた。

他に“良いもの”はないかと探していると、⑥R児「あのさ、プラスチックはどう?」b⑦「プラスチックってどんなのかな?」R児「ペットボトルとか?」S児「これはいけると思う!」と、⑦前のめりに話し、納得した様子で自信あり気な子ども達。ペットボトルを浮かべると、⑧⑨「浮いた~!!!!」と大きな声をあげ喜んだ。そこで、再びO児がハサミを乗せると、ペットボトルが回転しハサミが水中に落ちた。予想外の出来事に、子ども達は⑨⑩「ええー!」と驚き残念がっていた。すると、⑩O児「2個にしてみたら?」と製作コーナーから急いでガムテープを持ってきて、O児「ここ持ってて」と保育者に言い、2本のペットボトルを巻いた。水に浮かべると、ペットボトルはハサミも乗せて浮かんだ。⑪⑫「よっしゃー!!!!」「全然っ、落ちひん!」と大喜び。c保育者も一緒に喜んだ。⑫T児「これも乗せたら?」と製作コーナーの素材箱から筒(重さや高さのあるもの)を選んで乗せた。その筒がハサミの上に乗ったことで一段と子ども達の気持ちは高まり、素材箱からカップや皿などを取ってきて⑬O児「じゃあさ、これは?」と試していき、どんどん積み重っていく様子に⑭手を叩き友達と顔を見合わせて一緒に喜んでいた。



子どもの思い	ひと・もの・こととの関わり、心の動き	援助・環境(保育者の意図)
①浮くの!?	<こと>段ボールが水に浮いたことに驚く ・水に弱くて沈むと思っていた(予想)のに、段ボールが水に浮いた(結果)こと (予想外の出来事に対する発見の喜び)	
②これそらまめくんの代わりにできるんちゃう?	<もの・こと>重さのあるハサミを乗せる ・そらまめの代わりになる重さのあるものを選択 ・重さが加わっても沈まないかの確認	a きっかけづくり(絵本の世界の中で投げかけることで子ども達が魅力を感じているそらまめくんの世界を大切にしたい)
③いっぱいにしたら強くなるはず!	<こと>段ボールを増やそうとする ・1枚よりも多くした方が強くなるという予想	
④すごい!やっぱりさっきより強い!	<こと>長く浮いたことを喜ぶ ・段ボールの数(1枚よりも10枚)によって長く浮いた(喜び・発見・比較・数への関心)	
⑤だめやった...	<こと>段ボールが水中に沈んでいく様子を残念がる ・うまくいった経験からの沈む展開にショック・落胆	
⑥プラスチックならいけるんじゃない?	<もの・ひと>段ボールではない別のものを考え、友達に伝える ・経験から水に強い最善のものを考える(選択・思考・ひらめき・提案・性質への気付き)	
⑦そうや!	<もの・ひと>ペットボトルならいけると納得する ・ペットボトルを入れて水を汲んで遊んだ経験 ・ペットボトルは浮くという予想	
⑧やっぱり浮いた!嬉しい!	<こと>ペットボトルが浮いたことを喜ぶ ・浮くという予想が当たる(確信) ・友達も嬉しそうに喜んでいる姿を見て感じる楽しさ	b 問いかける (共通認識に繋げる)
⑨落ちた!あかんの~?	<こと>ハサミが落ちたことに驚き残念がる ・うまくいくと思った(予想)のにうまくいかないこと(結果)への落胆・ショック	
⑩2本やつたらいけるんちゃう?	<もの>ハサミを乗せるとペットボトルが回転する予想外の出来事への驚き ・1本から2本に増やすことを提案する ・段ボールも数を増やしたら浮いたという過去の経験からの予測・規則性・見通し	
⑪やった!!めっちゃ嬉しい	<もの>2本あればひっくり返らないのではという予想 ・ハサミが落ちた経験からの喜び・嬉しさ ・2本にしたらうまくいくという予想が確信に変わる ・盛り上がりを体感する(興奮・喜びの共有)	
⑫これもいける?	<こと>他にも乗せてみようとする ・段ボールの時に、一度は浮いたが時間がたつと沈んだという経験からの慎重 ・まだ乗せられるかという好奇心・挑戦・スリル感	c 気持ちは高まりを受け止め一緒に喜ぶ(その場の一員となりたい、共有、共感)

子どもの思い	ひと・もの・こととの関わり、心の動き	援助・環境（保育者の意図）
⑬いっちゃん！	<こと>周りにあるものを次々に積み重ねる ・もっと乗せたいという面白さ・期待	
⑭すごい！面白い！嬉しい！	<こと・ひと>高くなる様子を友達と喜ぶ ・みんなで楽しさを共有 ・積み重なっていくことへの喜び・自信	いつでも手にとれるところに素材を置いておく (すぐに試して欲しい)

＜考察：事例9-1＞ 全員のベッドのイメージや、段ボールは水に強いかどうかという疑問等が、クラスの共通のもとなり、瞬時に関心が集まった場面だった。思いつきを言葉にして試し、結果が出る度に対応策を考えることで、同じ素材でも数の違いで安定感が増すことを体験を通して実感していた。ハサミの上に更に筒が乗った瞬間からは、“積む”という新たな面白さが生まれ、保育者もその展開と一緒に楽しむことで、一人一人が次々に様々なものを乗せて試すという遊びが盛り上がり、結果的にその後の活動への期待にも繋がった。

◆事例9-2<何でくっつける?>

ベッドづくりでは、何を使ってペットボトルをくっつけるか①「テープ（以下、ガムテープの意味）でくっつけよう！」②「テープは水に弱いから紐がいい」という2つの意見から、最終的に子ども達は紐の方が水に強いと予想し、紐で挑戦することになった。ペットボトルを数本同じ向きに並べ、紐を下に通すためにペットボトルを持ち上げたり紐を下にくぐらせたりと、友達同士で声をかけあって組み始めた。いざ、紐を縛るとペットボトルが中心に寄り、弾けて崩れ③M児「ボンってなるー！」④児「爆発みたいや！」と面白がりながらも真剣に繰り返していた。⑤「どうしたらボンってならずにいくのかな？」と一緒に考えていると、⑥児「ここ（ペットボトルの境目）押さえとくわ！」⑦児「じゃあ、紐引っ張るな」と分担して付けようとした。しかし、何度も縛る時にペットボトルが浮き、隙間ができたりばらけたりしてうまくいかなかった。少しずつ飽きたり集中が薄れたりする中、⑧「どうしよう？何かいい方法あるかな？」と投げかけると、⑨「無理なんちゃう？」とつぶやいた。その思いに共感しながらも少し待ち、⑩「テープがいいんじゃない？って言ってた人もいたよね。試してみる？」と提案すると、半ば投げ

やりに「いいよ」「明日はテープにしたら？」という声もあった。

翌日、U児は早速テープでペットボトルを巻き始めた。そして「ねえ！すごい！」とその上に乗り、目を輝かせて言った。その声を聞いてみんなが注目すると、U児⑪「見て！乗れちゃうの！」と、興奮した様子で話した。「ええー！」とそれぞれ⑫テープを巻き終え、次々にペットボトルに乗る子ども達。V児「テープにしたらめっちゃ強い！」とペットボトルの上でジャンプしたり踏みつけたりしてその強さを味わっていた。初めはテープが短くてグラグラしたり取れたりしていたが、繰り返しテープを巻き付ける中で、⑬W児「動かんようになるねん」⑭児「強くなるねん」と、まずは短く切ったテープをつなぎ目に貼り、長いテープを全体に巻き付けて貼るなど工夫し、順を追って取り組むようになっていた。



子どもの思い	ひと・もの・こととの関わり、心の動き	援助・環境（保育者の意図）
①なんかすごい！面白い！どうやったらうまくいくんだろう	<こと・ひと>ペットボトルの動きを楽しみつつ何度も紐を締めようとする ・ペットボトルの動き（面白さ・発見） ・友達と一緒に面白さを味わう（共有） ・どうしたらうまくいかをを考えながら試す（疑問・思考・試行・葛藤）	
②ここがボンてなるな。 抑えておいたらボンてならないかな？OK！そっちは任せた	<こと・ひと>浮いてくるペットボトルへの策を友達と考える ・紐を締め付ける行為がペットボトルに与える影響に気付く（発見） ・ペットボトルが動かないようにする対処法を考える（役割分担・工夫・思考・伝え合い）	
③すごいことを見つけた！ 見てほしい！すごいよ！	<こと・ひと>ペットボトルの上に乗れたことを喜び、友達に伝える ・ペットボトルの強度が増したこと驚く（比較・発見の喜び） ・気付いたことをみんなに知らせたい（伝えたい思い）	
④ほんと？やってみよう！ ほんまや！強い！ ジャンプしてもいいける！	<ひと・こと>U児と同じ試してみようとする ・U児の興奮する姿から生まれる好奇心・興味 ・自分も乗れるか試す（好奇心・試行） ・どこまで強いかを知るために、さらに力を加え確認する ・頑丈にできた嬉しさ（感動・喜び）	a つまずきのタイミングで、少し待ち、きっかけの種をまく（うまくいかない経験や試行錯誤する姿は大切にしつつ、きっかけをつくることで、形になっていく面白さを味わって欲しい）
⑤強くしないと！	<こと>ペットボトルをテープでくっつける ・剝がれにくさや強度を高めるためにどうしたら良いか考える（思考） ・テープの貼る位置や長さを調整する（経験・試行錯誤・工夫）	紐やテープなど、いろいろな素材を用意しておく（試したい気持ちが実現できるようにしたい）

<考察：事例 9-2> 紐で苦戦したことで気持ちが薄れ、遊びが停滞した。少し待ってから保育者が提案したことは、再び子どもの気持ちを切り替える姿に繋がった。一方で、紐で苦労した経験があったことで、テープを使うと簡単にくっつくことに驚きや嬉しさを感じ、より良いものにしたい思いが膨らんでいったことがうかがえる。テープを巻く時にはより強くなる方法を考え、貼る位置や長さの工夫、友達とやり方の共有等、自ら考え友達と一緒につくる充実感や面白さが生まれていた。また、テープを巻いたペットボトルの強さを全身で試す姿から、子ども達は試行錯誤しつつも発見する面白さや感動を体験していることが分かった。

◆事例 9-3<実験②これはいけるかな?>



テープで付けたペットボトル同士をくっつける中で、隙間ができることにX児が気付き「ここ水入るんちゃう？」と指を入れて周りの友達に知らせ、「これいいんちゃう？」と素材箱にあったからし箱を隙間にはめていた。それを見ていたS児「え、それは箱やから水にあかんで」の言葉に、X児「え？これ固いからいけるで」と箱の角を触り「やっぱり違うの見てこようかな」と他のものを探しに行った。S児「じゃあさ、水に濡らして確認してみたらいいんちゃう？」、U児「いいね！」と急ぎ足で手洗い場に試しに行った。そして、S児「透明カップとヨーグルト（の容器）はいけたで！」U児「からしの箱はやっぱり破れちゃうの、ほら！」と自信たっぷりな表情で保育者に見せた。そこで、保育者がタライに水を用意すると、からしやお菓子の箱、ヨーグルトカップ、テープ芯等、様々な素材を水の中に入れては、◎「ぐにゃぐにゃになった～」「これは水入れられる！」「初め強かったのにずっと入れてたら破れてん」と感触や気付きを言葉にしていた。



<考察：事例 9-3> 隙間という新たな課題により、再度、紙・プラスチックと水の関係性を確かめることとなった。X児は「紙だが固いからいける」と固さに注目したが、実験①で段ボールは水に弱く沈む経験をしたことから、「紙は無理」とS児を含めた周りの子ども達は感じていた。しかし、からし箱は“もしかしたらいけるのかも”と半信半疑だったことから、X児の言葉をきっかけに再び試すことになった。また、早く試したいと気持ちが高まる子どもの姿に、すぐに保育者が、試せる場としてタライを複数用意したことで、他の子どもも興味をもち、次々に試す面白さを感じ、身近な素材と水の関係性に改めて気付く経験へと繋がった。

◆事例 9-4<綿を入れよう！>



ベッドづくりを始めた時から子ども達の楽しみだった“ふわふわ”を、Y児が「そらまめくんのふわふわあったで！」と登園時に見つけて持ってきた。保育室の中でもふわふわを探し、触れながら比べると◎「こっちの方が柔らかい」と口々につぶやき、最終的に“ふわふわ”は製作用の綿がいいと意見がまとまり、嬉しそうにベッドに入れていた。完成すると、早く乗りたい思いが溢れ、ベッドに乗るなり「気持ちいい！」「寝ちゃいそう！」など、表情が緩んだ。



～いざ！プールで浮かべ大作戦！①～



プール活動が始まり、完成したベッドをプールに浮かべさせることを保育者が提案すると、◎「やりたい！！」と大喜びで賛成した。◎「何人で乗れるかな？」◎「みんなで乗りたいけどそれは無理？」と相談する中、2人ずつ乗ることが決まった。水に浮かべたベッドに足をそっと入れると、少し沈み「ああ！」と思わず声がもれた。しかし、そのままベッドに乗ると、水は入るが浮き続け、◎「浮いてる～！」と大興奮で手を叩いていた。ただ、ベッドの中の水の量が増えると、中の綿が次々にプールに浮きはじめ、子ども達は慌てて集めてベッドに戻していた。

◆事例 9-5<パワーアップさせるためにはどうする?>



話し合いの中で、1回目の大作戦では◎「楽しかった！」◎「浮いた！」という喜びと共に課題点も挙げられた。◎「体に綿がいっぱい付いた」と綿が水に浮いてしまうことから、Z児「（綿は）浮くからくっつけた方がいい！」とベッドにテープで貼り付けることを提案した。また、子ども達は水が入ることでベッドが沈んでいくことを体感し、その原因を2つ考えた。1つは、ベッドの片側から水が入ってきたことで、AA児「こっちも周りにペットボトルをつけなあかん！」と、囲いの必要性に気付いた。もう1つは、ベッドを傾けるとペットボトルの蓋が開いている部分から水が出てきたことから気付いた、



蓋を閉めていなかったことである。蓋についてはベッドづくりの過程から子ども達の中で一つのポイントになっていた。“水が入るから閉めた方が良い”“水が入る方が重くなり本物の船みたいに強くなる”と2つの意見に分かれていたが、話し合いの中で“開いている蓋と閉まっている蓋の両方があって良い”となり、その状態で大作戦に挑んでいた。考えた上での選択だったが、②「やっぱり蓋閉めとかなあかんな！」と納得した様子で、開いている蓋を順番に全て閉め、閉め忘れないかを確認していた。

～いざ！プールで浮かべ大作戦！②～

「強くしたから4人で乗れる！」という子どもの声がありグループ（4人）で乗ることにした。前進するために子ども達の提案で用意したオール（竹の棒や長い芯）で漕ごうとしたり、前傾姿勢になって少しでも船を進ませようとしたりする姿があった。一生懸命進ませようとする友達の姿を見て、見守っていた子も「押したる！」と船を手で押したり、「ざぶーん！波！」と波をたてたりと、船が進む方法を考え、楽しそうな表情でプールに入っていた。



＜考察：事例9-4・9-5＞ 絵本でそらまめくんがベッドに乗って水たまりを進む場面を、自分達もやりたいという子どもの当初からの思いを実現させるため、保育者からプールでの大作戦を提案した。実際に浮かべることで、1回目、水の中で自分達でつくった船に乗れた嬉しさや、友達が乗る様子を客観的に見る楽しさを感じていた。同じ体験をする中で同じ気付きが生まれ、挙がってくる課題点に対してクラス全体で共有できた。実際に浮かばせるという楽しい経験を味わったからこそ、どうしたら良いのかを一人一人が自分事として考え、修理に参加し、2回目の大作戦へと期待をもって臨む姿へと繋がった。

＜考察＞ ベッドをつくるという大きな目標に向かう過程で、初めはそれまでの経験や知識をもとにひらめきや思いついたことを意見し、試してみるとから子ども達の試行は始まった。そして、いくつものつまずきを経験する中で、素材の特性や関係性等に気付き再確認し、その原因や改善策を考えながら試行錯誤していった。また、長期に渡った取組の中で、様々なことが子ども達の共通のイメージとして共有されたことで、友達との大きな関心事として一人一人が遊びに入り込む姿に繋がっていった。その過程では、友達と考えを伝え合いながら新たな考えを生み出し、別の方で挑戦し、つまずきの場面では友達と様々な思いを共有しながら取り組んだことが、次々に試行や実験への意欲となっていった。子ども達はこの実体験の積み重ねにより、不確かな知識を確実な知識へと変化させていると改めて気付かされた。



《学年考察》 5歳児は、ものやこととの関わりの中で面白さや不思議さの体験から新たな発見や気付きをし、知りたい、確かめたい、「もっと」と好奇心や探求心を高めていく。また、イメージを実現するために、今までの経験をもとに身の回りの材料から適当なものを選んで“もの”を組み合わせる、創意工夫する、原因を予測する、比較、試行錯誤するという実体験を積み重ねていく。目の前のことには没頭しながら楽しさを感じ、疑問やつまずきに対しても、意欲的に解決策を見出そうと予想や試行を繰り返し、分かった、できたと感じる喜びを味わっていた。刺激となるような意見を出す友達、自分の考えに反応してくれる友達の存在は大きく、友達の言動からは、視野を広げ、新しい考えを生み出していく等、友達と目的を共有しながら、より実現、達成させたいという気持ちに繋がっていったと思われる。保育者も仲間の一員となり共に楽しみ、子どもからの考え方や意見を待ち、時には提案する等の関わりが、子ども主体の遊びを支えていると考える。

V 総合考察

（1）科学する心とひと・もの・こととの関わりについて

0～5歳児の各実践事例と学年考察において、子どもの表出から見取った子どもの思いやひと・もの・こととの関わり、心の動きを検討したものを、「科学する心（の芽）」の具体的な内容として年齢ごとに抽出し、そこから捉えられた「発達」と、どのような科学する心の育ちに繋がるのかを「繋がる育ち」として表にまとめた（P13表1）。更に、ひと・もの・こと各事象との関わりを段階的かつ関連性を捉えて、図2（P13）に示した。

表1、図2より、ひと・もの・ことそれぞれとの出会いの中で、各年齢や発達なりの、かつ自分なりの関わりや心の動きである「科学する心の芽生え」は非常に多様であり、大きく「人・行動・情動・表現（言葉）・思考」の5つの要素を持ち合わせていると考えた。この5つの要素を体験しながら、経験を積み重ねていく中で、子ども達のひと・もの・こととの関わりが関連し合って、更なる「科学する心の育ち」へと向かっていくのである。

表1 表出行為と心の動きから捉える科学する心の成長過程～ひと・もの・ひとと関わる中で～

		0歳児	1歳児	2歳児	3歳児	4歳児	5歳児
思 い		なんだろう (初めての世界)	これなんだろう やってみたい	これがしたい こうなっているのか	こうしたい これが欲しい	これはどうか 次はこうしてみたらどうか	
科学 する 心 (の芽)	ひと の こと へ の 関 わ り	手に取る、 入れる、出 す、見る、 真似る、動 かす、笑い 返す、気に なる、反応 する (音)	探す、近づ く、目で追 う、見る、手 で双眼鏡を つくる、模倣	見る、触る 保育者に伝える (表情)、揺らす、 試す言葉で伝え る、探す、持つ て遊ぶ、使つて遊 ぶ、ホースを近づ ける、言葉で伝え る、笑う	(ワゴンに)物を載せ る、運ぶ、引っ張る、止 まる、見る、考える、ゆ っくり歩く(調整)、つ くる、見立てる、言葉で 伝える、持ち運ぶ、伝え (言葉・表情)、気付 く、よく見る、目で追 う、考える、中身を確認 する、思い出す、微笑む	見つける、道具を使 う、何度も繰り返す、 取れるまで取ろうと する、手伝う、友達と 同じ方法でする、自 分でしようとする、 伝える・知らせる(言 葉)、見つめる(観 察)、つまむ、触る、 掴む、引っ張る、引っ かける	選ぶ(素材・用具)、いろいろな もので試す、増やす、言葉で伝え る、考える、一緒に考える、友達 の言葉をヒントに考える、経験 を生かす、提案する、友達と喜 ぶ、一緒につくる、疑問を投げか ける、友達の行動(言動)に意見 する、よりよい方法を考えよう とする、解決しようとする、応援 する
	心 の 動 き	気になる、 反応、興 味、感触、 聴覚、喜 び、嬉 しい、安心感	興味、残念、 意欲、経験・ 記憶から の行動、安心感	気付き、確かめよ うとする、惹かれる (興味)、驚き、 違いへの気付き、 変化への驚き、発 見、共感、興味、 試す、不思議、欲 求、感触、試す、 期待、面白さ、安 心感、嬉しさ、共 有	楽しむ、興味、生き物へ の親しみ、意識を向ける、 気付き、擬人化、経 験と繋がる、満足感、自 慢、感覚(重さ)、自信、 嬉しさ、共有、疑問、好 奇心、視覚的な面白さ、 驚き、不思議さ、悲し さ、予想、欲求、考 えて試す、安堵、安心感	興味、比較、経験、嬉 しさ、満足感、共有、 気付き、親しみ、工夫、 苛立つ、予想、確 信、もどかしさ、樂 しさ、意欲、強い意志、 仲間意識、関心、安堵 感、やり遂げた感、興 味の高まり、意外、好 奇心、自信、大切に扱 う気持ち、気になる (不思議)、見立て、 確認、感覚、葛藤、喜 び、専有感、イメージ	驚き、予想、結果、発見、選択、 確認、比較、数への関心、ショック、 残念がる、落胆、思考、提案、 納得、共感、同調、自信、喜び、 確信、樂しさ、予測、規則性、興 奮、共有、慎重、好奇心、挑戦、 スリル感、面白さ、期待、試行、 探求心の芽生え、関心、実感、疑 問、葛藤、気付き、役割分担、工 夫、伝え合い、興味、感動、試行 錯誤、苦労、よりよいものにした い思い、充実感、素材への注目、 性質への気付き、実現、客観視、 知識、ひらめき、つまずき、見通 し
発達		感覚を通した目の前の (身近な)ものとの関わり 身体的発達 視界の広がり 探索活動	好奇心が活発になる、体感する いつもとの違い(違和感)を感じる 経験を目の前のことと繋げ始める 自我の芽生え 言葉にならない思いがたくさん湧いてくる いろんな経験をため込む時期	ものとの関わりの中でちょっとした思考が加わる していることが目的になる(目的が生まれる) ものへの興味・好奇心の芽生え	自分中心の友達関係、経験を遊びに取り入れ始める (目的が生まれ、ものや状況を選ぶ) ものへの興味好奇心の高まり 自分なりの目的をもって遊ぶ	考 える・試 すことを樂しむ 友達と目的を共有する 同じ目的をもって遊ぶ 大きな目的が生まれる	
繋 が る 育 ち		ひととの出会い 関わろうとする気持ちの芽生え 感情の芽生え 身近な大人との共有(→愛着) ものに関わることへの安心感 身近なものへの興味(探索) ひとのこととの関わりの広がり	感情が満たされ、意欲へ(もっと、もう1回) 繰り返す一周りの変化への気付き 思考の芽生え	状況と経験を結び付ける 行動範囲の広がり、経験・視野の広がり ひと(先生・友達)と共に	變化を楽しむ 探求心の芽生え ひと(先生・友達)と共に	思考の深まり 論理的思考の芽生え ひと(友達)と共に	

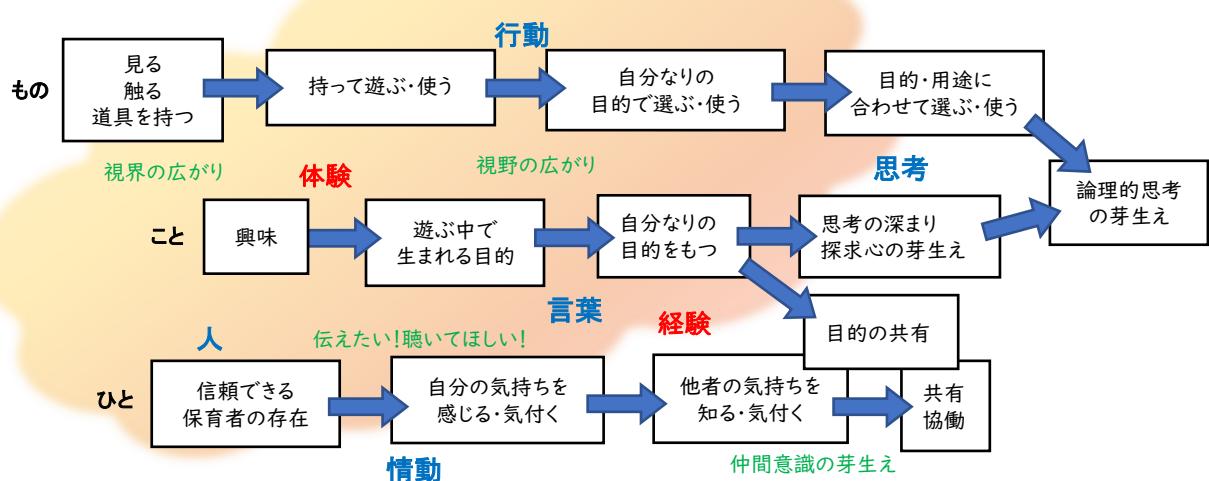


図2 もの・こと・ひととの関わりの繋がり

(2) 科学する心を育む保育者の関わり（援助・環境）とは

▶環境の在り方について

子どもにとって身近な自然物、自然現象は、心を動かされ、新たな気付きや不思議さ、面白さといった感情をもたらし、身の回りの出来事に主体的に関わり、考え、創り出していく力の芽生えに欠かせないものの一つであった。また、子どもはひと・もの・ことと出会い、興味や関心をもち、関わる中で、感覚的に物事を捉え、自分なりに感じ取る経験を積み重ねて、知っていることへ、自分のものへ、そして、知識や理解へと繋げていた。その過程で経験する心の動きである科学する心の芽は、子どもが関わる“もの・こと”と存分に関わることができる時間的空間的な環境の保障の上で芽生えていく。日々の遊びの過程での、子どもの小さな発見、つぶやき、疑問、考え、好奇心といった科学する心の育ちを促し、保育者が見逃さずに広げられるようにするためにには、多様な素材や用具（使い方は子どもの発想に任せること）、身近な自然や自然事象に自ら関われる環境、試し工夫できる十分な空間、時間等の環境構成をすることが必要であり、子どもが思いを存分に実現しながら、じっくりと事象と向き合える（夢中になれる）場や豊かな出会いの場となるような環境が、科学する心の芽生えとその育ちに繋がると言える。

▶保育者の存在について

低年齢の子ども達の世界におけるひと・もの・こととの出会いや初めての出会いには、不安な気持ちで心を開くことができないことも多いが、子どもの声にならない声から思いや気持ちを保育者が読み解き、日々温かな視線や言葉で優しく応えていくことが、大人への信頼感（愛着）となり、子どもが安心して周りを見る、様々な“ひと”や“もの”への興味や関わってみようとする思いの芽生えとなっていた。さらにこの関係性を基盤に、言語面において、子どもは心の動きを表情や視線、仕草、声などで表す思いが非常に多く、特に低年齢の子どもの表出は主に非言語によるものである。このことから、保育者は子どもの言葉以外の方法での表出にも注視し、思いを汲み取って言語化し、共有、共感すること、「子どもの声を聴く」ことが、不可欠かつ重要であると言える。自分の思いを理解してくれる保育者の存在が、子どもに安心感をもたらし、目の前のいろいろな“もの・こと”と関わり、「してみたい」「してみよう」という思いを抱く要因となっていくのである。

また、保育者は仲間の一員となり、子ども一人一人の関心や試したい思い、好奇心等、様々な思いを受け入れて、一緒に全身で面白さを感じながら楽しむ（共遊）と共に、子ども達の気持ちを汲み取り、見守り、待ち、成長に伴っては、課題への促しや投げかけ等が、子どもの更なる「やってみよう」「もっとこうしたい」という強い思いに繋がっていくと考える。子どもが何に気付き、何をしたいと思っているのか、何を楽しんでいるのかを、子どもと同じ目線で物事と向き合う姿勢が、子どもがひとと共に喜びを味わう（感じる）経験となるのである。このように、保育者はもの・ことへの関わりから生まれる心の動きや表出行為である子どもの科学する心の芽生えを支え、その関わる過程を大切にしながら、科学する心の芽を大きく育てていく重要な役割にある。

(3) まとめ

V (1) (2) で述べてきたように、子どもの発達や思いに沿った様々な関わり（援助・環境）が降り注ぐ中、ひと・もの・こととの出会いの中での育ちや学びの経験を積み重ね、幹を太くし、枝葉を広げながら、一人一人の育ちの芽は、科学する心の木として育っていくと考え、図3 (P15) に示す。

VI 今後の方向性～成果と課題～

子どもの声を聴く保育の実践を積み重ねてきたこの数年間で、日々、子ども達の姿を語り合うにあたり多くの事例が保育記録として蓄積してきた。一方で、本研究にて検証した事例数は、年齢により偏りがあり、科学する心の芽生えやその育ちの見取りが不十分な点もあるのではないかと考えられる。しかし、ここで取り上げた以上の事例について職員間での語り合いを実施している事から、今後は本研究結果に照らし合わせながら、子どもの科学する心の捉えを深めていく必要がある。

また、本園の分園という形体上、今！という時に職員みんなで集まっての語り合いや議論する事の難しさ、日常的な姿を通した子どもの育ちの把握にくさから、育ちの連続性を感じ取っていくことの難しさを感じている。しかし、今回、論文作成にあたり、担当年齢の事例から、各自が実践を振り返って、目の前の子どもの姿に対する気付きを得、更に話し合いまとめていく中では、発達や育ちのプロセスへの気付きも得られた。各自、各棟、時には作成者間で、論文全体を確認し合う事や話し合う事はもちろん、何より形となった論文そのものが、今後、園の文化を語り継ぎ、職員の更なる子ども理解の一助になることへの期待は大きいと感じている。育ちの連続性を捉えられるよう更なる研修方法等の検討、工夫への課題はあるものの、本研究に取り組んできた中で得られた保育者の関わりの大切さや子どもの見方を活かして、今後、更に子どもの声を聴き、発達を捉え、子ども主体の保育を目指した具体的な援助や環境構成の在り方についてを深め、一人一人の科学する心を育んでいく研究と実践を続けていきたい。このことが保育の質の向上に繋がり、それが全て子どもの育ちや学びに還っていくものだと考える。

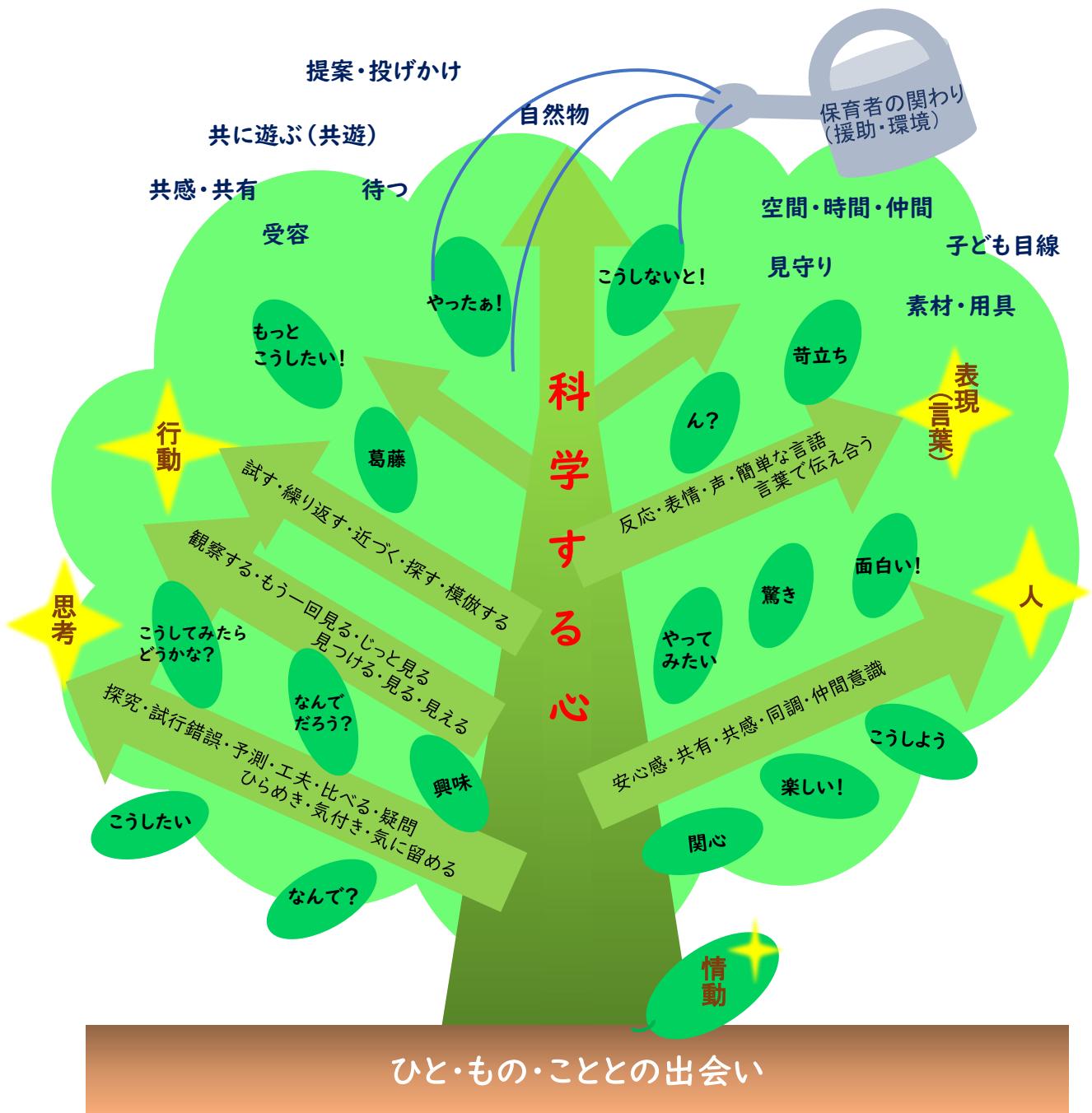


図3 科学する心の木

～あとがき～

本研究を進めるにあたり、改めて各年齢の事例を読み解く中で、非常に多くの子ども達の生き生きとした表情や行動、思いがあり、その背景には、いつも自然に囲まれた、いつでも身近に自然物の存在があるという、本園の環境の素晴らしさに気付くことができた。そんな環境のもと、子ども達は、保育者の存在に安心感を抱き、ものごとを見て、感じて、考える楽しさとして予測・予想と改善を繰り返し、思考と試行を繰り返して創り出していく面白さを感じている。そして、多くの学びを得る喜びを得、そこに関わる人と共に在ることで感じ合う喜びを味わい、様々な感情（感性）が育まれていくことが分かった。子どもは大人の想像を超えて、様々なソウゾウ（創造・想像）力で多くの出来事を楽しむ。そんな子ども達を尊く想い、子どもの心の動きを楽しむ保育を、今後も大切にしていきたい。

【研究・執筆者氏名】

研究代表 山中理恵子

研究者 寺町歩・杉村奈奈子・赤埴真澄・山崎加代子・今井麻記子・山崎めぐ美・小林里栄・飯塚純子
楠綾夏・河原正子・藤本利絵・小林香奈・河井真美・宗國蘭子・山本美咲・濱田直樹・前田優歩
尾無久瑠美・石川佳穂里・山本記子・田中三代子・福井和代・大治京子・田中淳子・永田しのぶ
小田麻衣・米野千夏・上本智子・今井菜々